

表面の方の水だ
自分は舊い流が好きだ
波立つ物は
表面の水だ
そして理由なく
我をさらはんとする
恐しきことだ

(完)

起きり、俺一人の體で、調和して居る
俺は俺に向つて感謝し
俺自身を悪む
俺は俺一人の爲に、修養し、努力し、苦悶する
俺は一人だ
たつた一人だ
大な王國を背におつてゐる

王

國

四丙木下長保

俺は一人だ
考へるのも
悲しむのも
惱むのも
何をするにも
俺は一人だ
味方は俺一人だ
敵も俺一人だ
すべての争ひ、呪ひ、惱み、が俺一人の體で

この王國には
論語も、聖書も、神話もいらない
宗教も、道徳も、法律も
あらゆる學科も
釋迦も、孔子も、キリストも
トルストヒも、セザリンヌも
全て俺には不要だ
俺は一人だ
これでたくさん

(完)

秋ばれ
四丙木下長保
新葉の、匂も嬉し
秋晴の
空一ぱいに百舌鳥の囁く
さしはさむ、木の間を洩れて
秋の陽の
冷き土に、沁みてゆくかな
來ぬ人を、待ち詫ぶ心
逝く雲を
木の間がくれに、いらだちて見る (完)

秋の夕の色淡く
ねぐらに急ぐ鳥鳴き
やがて暮色はおそひ来て
古城山のいたゞきに
弓張月の上る時
清く聞ゆる笛の音に
庭の紅葉のハラ／＼と
散るを見ること淋しけれ (終り)

嗚呼尼港

三甲藤田正雄

秋の半も過ぎて
木々の梢のうら枯れつ
早や日も西の山の端に
沈めば寒さ催しぬ
秋の暮
四丙松下義夫
(完)

嗚呼ニコリスクニコリスク、
聞くも恐ろしき虐殺に
吹く風寒くなまぐさし
流るゝ河に血潮あり
尻はつんで山をなし、
手は切り取られ足も無き。
斯くも無惨にバルチザン
あゝバルチザン、鬼なるか。

丈夫如何に思ひしか。
一死固より軍人の

本分なれど、あゝ無念

虎狼の毒手にたほるとは。

嗚呼「五月二十四日の

午前十二時忘るな」と

悲痛の一語、嗚呼然り

古今未曾有の國辱ぞ。

あゝ憎きバルチザンよ

よくも同胞我國民を

七百餘名も殺せしな

如何ではらさん、國辱を。

あゝ現代の青年よ、

この憤をば忘るゝな

國辱雪ぐ責任は

汝が雙の肩にあり。

雜吟

臼田紀六

淡雪の消え残る山夢に立つ

大江に影をひたして 雁渡る

日は落ちて雁が音遠し荒野原

新月うすう湖をすぢかひに雁の棹

宿いそぐ巡禮の笠に雁落つる

芋の葉に蟬よわり居て戰ぎけり

芋の出來背戸の馬屋は日もささず

山家十戸いよ／＼せまし芋の山

高原のはてにやせたり冬の山

荒煙絶えて水白う四圍の山眠る

根分けして水仙の出來を隣かな

藏並ぶ 陰に小さき 水仙花

蟄居して 水仙の花 白う咲く

猪追へる一隊の獵師山荒るる

虎狩の日暮れて遠く高吼ゆる

大猪を射し公達のほがひかな

餅搗や 隣は吝嗇の 庄屋にて

餅搗の 音ねてきくや 老措大

寒月天心人なき街を通りけり

寒月や わが影長し 橋の上

吾が泣かんにあまりに明し春の月
春雨と 昔語りや 夢させて
春雨や飲泣く音のわれに似て
春さびし母なき稚兒の頬に涙
萬歳や雪晴るる夕をむつましく
萬歳を泊めて一村の集ひかな
萬歳や 大紋に夕日 赫とさす
萬歳が交々門松をめでたやな
萬歳を病む兒に母の涙かな
天地静か星かげうけり井華水
紫の空汲み入れぬ 井華水
若水を汲む手に拜む 初日哉
行く秋や 力なき蟬 緣に這ふ
時の鏡木の間流るや 暮の秋
銀杏散る山寺さびて秋暮るる
秋雨や板塀に乞丐もの食へり
秋雨や 千年の古寺 幕の鐘
諫忌宿老閉ちたる門や秋の雨

出代りのお鍋に逃ぐる末子かな
出代の厨ごとのへるまことかな
出代の 松やの妹 お竹かな
故郷出でゝ十有餘年 雁歸る
雁かへる去年ぞ今宵よ亡妻詠みし
細雨しどゞ花なき里に歸る雁
書に倦みて黙す椿の落つる音
椿散る 里を小町の 狂ひけり
椿咲く 山路に會ひぬ 白叟翁
演習の 惣ひ見出でぬ 路の臺
崖下にのびほはけたり 路の臺
妻と句を詠めば富貴や路の臺
豆撒きの聲病床に聞く身かな
豆拾ふ家の廣さや 鬼やらひ
豆撒いて鬼等年かこつ笑かな
初追離 小さき夫の聲笑ひけり
逃ぐる舍人局にまごふごよみ哉

白

集

五甲 北村由藏

泣かぬ蟬捕へて暫し無言かな
白蓮に 寂しき寺の 真晝哉
秋
名月の池にうつらう雲も無き
秋の雨 檻に虎寝る 朝かな
月の夜に誰を呼ぶやらさりくす
冬
燈一つ見あてたりけり虫の山
蠟螂や 蔓を戻りし 紹の羽織
酒倉のつめたき壁やちゝろ虫
熟し柿の 一つ残りし 隣かな
先生の家に柿おくる 田舎哉
びつたりと土に動かず桐落葉
秋の風 肩すぼみたる 男なり
冬
遠火事を 望む人あり 瓦屋根
兎狩り山をあらして 歸りけり
物けする 大工の庭の 吹雪哉
鳩百羽 羽音に朝の 泳え迫る
深井戸に滴の音や 泳え迫る
寒月や キラリと光る路傍の痰

小簞笥に 音の氣配や 冬の夜
空席を 數ふ教室の 寒さ哉
親子二人 男ばかりの 寒さ哉
影の身も冬は日向を歩みけり

五甲 北川佐一郎

案山子

蓑笠に身をやつしたる案山子かな

月

老松や 樓門さむし 秋の月
山寺の 鐘の音さびし 秋の月
春月や 梅が香高し 雪の庭

雪

犬ころのよろこびころぶ今朝の雪
雪だるま並べて立てり雪あかり

社頭の曉

玉垣の色さびにけり初日の出

正月

初荷引く 車の音も 新たり

十七字集

桶上亮一

新年

柴の戸に白梅かほる日向かな
今年こそ日記附けんと松の内
猿曳の倒して行けりかごの松
松の内早や過ぎ去りて餅の微

時 雨

雨やみてみどりの中の花柘榴
時雨して小田の蛙の闇夜かな

春 風

新調の服かほるかな春のかせ
傷敷や凧あぐ子等のふみし麥

初 夏

春風や散る花かぞふ僧ひとり
田舎道俄にせまし茶つみどき

山影を羽にあしろう蜻蛉かな

戸口まで夏は來にけり金魚賣

磯にて

貝拾ふ乙女やいその千鳥なく
家いづこ親はいづこに鳴千鳥
潮しそく真砂にかほるいそ嵐

夏

夕立に奈良の土産を濡しけり
えざらつく鶏もあり日長かな
みね遠し日暮しのなく杉木立

秋

夕暮れのもや淡うして月見草
何をまつ様子や案山子の夕姿
夕風やまねく尾花に出でし月

片わかれの月かげ清し渡るかり

立

湯歸りにゞ買ふ人や除夜の鐘
寒空も襦袢一つの案山子かな

塞

月あかりまことに米とぐ苦學生
苦學生ズボンをつゞる秋の風

霜

あさにわだちの主や苦學生

(終)



部 報

雑 葉

學藝大會之記

十一月二十二日、大正九年度第二回學藝大會は

開かれぬ。午前中二時間授業の豫定を一時間削つて午前九時半より行はるゝ事となれり。以て今回は稍出演者の多かりしを知る可しと雖も、吾人は此の學藝部の益々盛大となり、多々益々可なりと雖も、少くとも一日位は此の爲に費すを惜まざる状態に到らんことを切望する者なり。

開會之辭。急霰の如き拍手と共に登壇せられし藤下先生、野次は之れ野の次なり。野の次は山或は海なり。其の勢巍然として大空に交はり、威嚴

四、孝 行 三甲 須 藤 德 成
五、星 の 子 四甲 西 村 和 一
星の子星太郎が一旦下界に降り種々の鍛錬を経て上天し星界の王となるてふ一場のお伽話

五丙 池 忠三郎

徹底せざりしかと遺憾に思ふ。

奇を以て論じ、論じて奇、論じ了つて平凡野次演説と化す。蓋し後半其の過激に失せしに依る

七、英語獨唱 五甲 赤井幸造

三、公德 二甲 望田金二郎

前曲、流麗の一言に表はる。せゝらぎの水音か落葉を舞はす秋風の聲か。轉々樂天の間に翻揚

するの思ひあり。後曲山上峨々の斷壁より白壁を轉ばしむるを思ふ。

四、Come where the white eicies are grouins.
Nearer my Bos to thee.

突！はぬ。かつ！碎く。さらさら真砂の間を下

る。下は何ぞ、吹雪吐く溪流なりき。

八、祖先崇敬 四乙 川瀬矩三

三、幼稚なお伽噺 三甲 藤田正雄

辯士の態度懐らす。野次の反感を買ふや甚し。場内喧騒。

九、趣味に就て 四乙 新井泰美

五乙 掛札 弘

聲よくとほり、内容可成豊富なりき。

一〇、楠露（謠曲） 四乙 茂森徳二郎

五乙 波木居齊二

群新歌中の一古曲、萬綠草中紅一點と云はむか

吾人國粹を尊ぶ。君に謝する所以なり。

一一、スチブンソン（英語） 二乙 鈴木周二

五甲 東野太一郎

發音もよく、よく解りしも稍聲が小さく滿場に

今少し反應説明の工夫を要す。

一二、戦亂前の獨逸 五丙 野口富藏

五甲 東野太一郎

歐洲大戰突發の経路、獨帝カイゼルの計畫、一代の跳梁兒が野心を評論して遺憾なし。比較的長時間よく傾聽せしめたる、以て君の辯の力を証するに足らん。

一三、川の上（英語） 二甲 小川孝一

五甲 三和一夫

一四、死の前に 四甲 滉本賢瞳

五甲 三和一夫

放縱より入つて絶大眞理に結ぶ。恰も徒然草に於ける兼好の論法其の儘の感あり。無常の襲來水火よりも急なりと說き須く肉體を超せず滔々懸河の辯を振ふ。正しく一大傳道師の卵。

一五、彦根第一中學校 五丙 大庭唯一

四甲 西村和一

校風の廢退を論じて慷慨涕泣、言や實に赤誠の權化。氣堂を壓し肅として聲なし。熟魂人に迫る。偉大なる人格の人よ。余は敢て此の語を呈せんとする。それ墮眠墮落の輩につぐるに君の言を假らん。醒めよ、墮弱の眼りより。いざ醒めよ井底の眠より。榮ある我彦根第一中學校の名聲を奈何。悔悟の日近きに有らん。

ブルータス

カシャス

アーテミド拉斯

メテラス

從者

群衆

不破外數十名

練習不足の憾は有りしもシーザーの死の場等殊によく行きブルータスの棺前演説も上等の出来なりき。

三、愛の行方(悲歌劇)

第一場 職工の家

第二場 工場

第三場 野原

役割

少年職工

職工の父

會社の重役

職工

旅人

車夫

女

神

野瀬光三

西村和一

川瀬規矩三

青木義雄

生浦晃淨

宮尾源次郎

西村和一

日早朝西京に向ひぬ。吁!金龜城下の熱血兒!戦雲晴々たる京洛の旭日輝き出す我選手戰捷を祈りつゝ、強敵を呑みて武徳殿に向ひぬ。

開會式、型等型の如く進みて青春の勃情に燃ゆる青年の鐵腕奮ふ快闘今や開かれぬ。我選手の勝負左の如し。

○○本校	香川大川中學	谷口榮五郎
○○本校	辻井正康	辻井正康
○○本校	藤井健	藤井健
○○熊本農學校	辻井栢	辻井栢
×本校	幸島一郎	幸島一郎
岡山閑谷中學校	平井正二郎	平井正二郎
○○香川大川中學	大島英一郎	大島英一郎
○○本校	見良介元	見良介元
○○大阪高商	岩井佐太郎	岩井佐太郎

赫々たる炎帝の下に骨も碎けよとばかり投げつ投げられつ血を流し涙を流しての練習に練習。必勝せんよりは何んの雑念もなし。見ぬ武徳殿を

武徳會出演記(柔道部)

×(上宮中學) 中山佐武郎
 ×(本校) 小河原脩三
 敵は偉大の大男なり小河原敵の胸ぐらを取りて少しもゆるめず「エイヤエイヤ」ともみ合ふばかり遂に雌雄を決する能はずして引分けとなる。

可成の出來、其の努力を多とす。

毛、兒島高徳(唱歌)

一年有志

何か故障の爲お流れとなりぬ。當日唯一の遺憾

事なり。

閉會之辭。藤下先生急用あり、野口君代辯さる。

掛札	大庭唯弘
藤田義藏	市上田猪之助
速水佐一郎	不破外數十名

時既に薄暮なりき。要するに今回は内容も比較的充實し盛大なりき。たゞ最後の演劇は新しい試みにして且面白しひ雖も、其の準備に多大の時間を取り其の間場内喧騒を極めて時間の損失と、講堂の静寂を破壊するとの傾向ありし事は今後此の種の出演につき大いに考ふべき問題たらざるや否や妄評多謝、多謝。

青年演武大會出演之記(剣道部)

八月五六兩日に涉り武徳殿に於て開かるる青年演武大會に出演せんとて三伏の嚴暑に屈撓せず鐵腕を鍛えし幸嶋道介、漢見良英、辻正康、藤井健の四選手必勝を夢見つゝ氣焰萬丈白虹を吐きて枝を掠り各々ゆ枝を繪舞臺に發揮せんものと四思ひては兩手を擰げてつたつ先生に全力を擧げて武者振つく。力の盡き果てた體を家に運びし事そもそも幾日ぞ。思へば大正九年八月の六日隆々たる双腕を撫し互に握りしめては士氣を鼓舞し合ひ東天白む六時廿分校友に送られて出發しぬ。胸は高なる腕はなる。甲冑に身を固むる剣道選手我等が入京に顔を輝かす。豪語數談鳴呼銳意は勃々意氣軒昂。明くれば七日武徳會第廿一回青年演武柔道大會當日なり。一行午前七時神に武運を祈りつゝ宿舎を出す。數千の選手眼を光らして控ふ、武徳殿の物凄さ。試合は山梨農業神戸一中の争に初まる數を重ねて四十三回。

戰す遂に引分けとなる。

×(香川工藝) 渡邊弘行

本校平川缺席の爲め小河原之に代る、敵は天晴なる武者小河原敵に傷を負はず能はず引分けとなる。

○○三豊中學 白川甚六

兩雄襟をとるや睨み合ふ事暫し、岡見隙を得て襲ひしも敵の逆手に合ひ敵に一傷をも負はず能はずして倒る。

×(神戸精武) 井上嘉市

大谷得意のはね腰を以て奮闘す敵危く見ゆる事度々なりしがご敵の死力の防戦により引分けとなる。

遂に武徳會青年演武大會も此に終を告ぐ必勝を裏切りしを殘念がり九日午後九時卅分彦根に歸着せり。

(M.O生)

× × × × × ×

4 吉田(良)

藤井(源)

安

部

3 小林

寺

山

森

村岸(誠)

田

羽根田

長崎

北村(省)

伊藤(倭)

居

武術部にては過ぐる年湖東の原野に大演習を行はせられし際畏くも大本營行在所を本校に置かせられし當時を紀念せん爲十一月十三日行幸紀念式を行ひ道場に於て紀念演武大會を開催せり、朱鞘の大刀小脇にぶつこみ馳せつくる面々は鐵血溢るゝ金龜城下の赤鬼共一騎當千の荒武者なり。拔山蓋世の勇を揮ひ龍攘虎撃、劍電白雨、凄愴の氣満ちて暫しさしの道場も搖がん許りなりき。因に當日の勝負(紅白)左の如し。

紅 白

×(本校) 大谷英一

持片谷増角岡中朽禿木西鈴細岩
 元倉(滋)田田村川木林山川
 西柳高井大吉吉橋本(章)
 譚本崎上崎岡田崎川橋
 3

5 山田西鹽朝樺中天河青村若
 田部野谷奈木居野村山瀬林
 5 藤井(源)野瀬(光)川村(庄)
 青吉山西中野小辻井(太)
 野木澄岡依江村泉
 6 山原3

武術柔道部報

秋氣武術大會柔道の記

武術柔道部報
秋氣武術大會柔道の記

一二九

副將辻
大將漢見

來賓試合

副將 森
大將 幸嶋

二二八

Diagram illustrating the distribution of surnames from the 'Kōzō-kyō' section of the 'Edo-chōmeishō'. The names are arranged in columns, with lines radiating from them to a central point, indicating their spread or frequency.

姓氏	分布点数
西村	2
安居	2
成宮(義)	4
佐々木	2
森	2
谷	2
澤	2
田	2
佐々木	1
中川(治)	2
政居	2
角田(忠)	2
高田	2
横澤	2
安田	2
新井	2
竹中(榮)	2
西澤	2
大橋(武)	2
山崎	2
失食	2
中木	2
木2	2
木1	2
大橋(武)	2
島宗	2
谷谷	2
武谷	2
清水(宗)	2
石岸	2
大橋	2
千村	2
澤一	2
澤千	2
北川(康)	2
藤谷	2
深田	2
清水	2
大橋	2
岸島	2
守菊	2
守川	2
守田	2
守松	2
角田(幸)	2
角田(清)	2
若澤(井)	2
若澤(政)	2
葛西	2
吉田	2
小野	2
北村	2
西村	2
藤井	2

武道寒稽古記

理事記

大正十年一月十日より二十日迄十日間五寒は恰も身に切り迫る時我が道場は寒稽古のため湧き返へされた。毎朝帆布の五時の汽笛が寒夜の寂寥を破つて報じる時早や床を蹴つて身支度した道場に詰めかけ淋しい待ち顔の電燈を慰めた。高鳴りする腕、温い而も高潔な血潮がたざるにたざる胸を寒氣凜烈なる道場に十分發揮する快事でもあつたさて火蓋の切らるゝや奮戦酣戦の後東天を仰ぐ時

我等は言ひ難い快感を覚え六時半引き揚げた本年は有志者も増加し近年稀なる盛大で柔剣合して百廿餘名を算し遂に道具の不足を來すに至りしは我武術部のみならず帝國武道の爲慶賀に堪えない。この舉や固より心身の陶冶を期するのであれば擔任先生なる眞野、本多、室谷の三先生の下に最も嚴肅に遂行し七十三名の皆勤者を出せしは是亦特筆すべき事なり。

尙ほ最終日たる二十日には皆舉つて寄宿舎食堂に於て互に獲得せし自慢話を語りつゝせんざいの御馳走に移りし事は記すに足る事なり。終り。

水上部報（一）

伊吹の残雪まだ消へやらぬ四月の頃より新艇比良にうち乗りて去歳の恨を晴し、新艇を贈られし先輩諸兄に報ひんと、池田部長指揮の下に漕法の研究に力め、風の日も雨の日も、逆捲く怒濤を物ともせず、荒れ狂ふ琵琶の湖上を左往右往と漕ぎ廻る我水上部の七勇士。

堺ヶ濱出漕之記

五月上旬突如として、神戸新聞社より「来る三

後明日の用艇神戸高商のボートを借受けて練習するボートの型の異ると操法上海と湖とは種々なる點に於て異なるとにより海に経験なき我等は多大の不自由を感じたれど苦心練習約一時間の後には漸く自信生ず、此の夜は一室に頭を並べ作戦計畫に餘念なし、湊川神社に参拜後一同寝につく。

明ければ三十日、早朝より電車にて堺ヶ濱會場さして押しよせたり、白砂青松の海岸は人を以て埋め沖には應援ランチの列を見る、手に手に應援旗を振り赤よ青よと叫ぶ聲、競漕艇に合図する汽笛の音は波静かなる瀬戸内海にひゞき渡る。

第七回（八百米）コース 着順

彦根中學

一
二
一

御影師範

一
二
二

敵は名にしをふ御影師範我に取りては年來の怨敵なり、彼の積みし練習の猛烈をかたる其の體格顔色も何ぞ恐れん、いざござんなれ先輩のかたき取つて呉れんと劉曉たる奏樂に送られつゝランチに曳かれてスタートに着きぬ、旗幟は岸に翻り應援實に盛なり、方向を定むるや號砲一發、ソラ漕げ

大阪高工

一

優勝戦（千百米）コース 着順

彦根中學

一

川崎商船學校

二
三
二

神戸商業學校

一
二
三

午後一時半第二回戦は開始されたり、彼等兩敵の意氣亦賞すべきものありと雖も到底我彦中の敵にあらずミッドルに至らずして艇速落ち無惨や七艇身の差にて勝は我手に歸しぬ。

これより水鳥と居を同じくし、猛練習を開始しぬ、日も近づけば朝は六時より大洞内湖にオールの響高く、午後は太陽の西山に沈むまで荒浪の間に舵手の叱咤の聲を聞きたり、五月二十九日愈々遠征の日は來りぬ、放課後我等は熱誠なる應援團諸君の萬歳の聲に送られて神戸の戰地へと向ひぬ後に控へる大責任を思はぬにはあらね共闘力すわれる我戰士彼方此方の車窓に寄りて高駿古の豪傑にも似てあな頼母しや。京都も過ぎいつしか大阪も過ぎ神戸驛に着きしは午後四時頃なりき、有難くも先輩諸兄の出迎へにて宿に案内され暫く休息や實に大なり。

十日の第九回關西聯合短艇競漕大會に參加されたし」と、我部は直に快諾の報を送れり、此報に接するや我等の元氣百倍しぬ。

我等の先輩に、第二回の本大會に於て全國の荒武者連を、かたづばしからなぎたふし、關西の驕王彦根中學の名を全國に轟かしたるなり、以來本年まで出漕せざりしを再び其の名を示さんとす、若し引けを取ることあれば何とする、我等が責任

八幡商業 二
彦根中學 三
浪稍荒くなりぬ、此一戦こそ實に關ヶ原、浪にもまれ、風に曝されあらゆる辛苦を嘗めて鍛へたる此赤鬼の鐵腕いざ試みん、兩敵共に體格に於ては我に勝り殊に高工は二十五六の髭武者連近年本大會の月桂冠は此奴獨專する所と聞く、八商も其腕中々侮りがたし。然れ共我には彦中魂あり何ぞ彼等に霸を唱へしむべき、三艇はスタートに着きしが浪の爲方向定むるに困難なりき。

あゝ其の瞬間！白煙一發天高く冲せり、三艇は矢を射る如く飛ひ出しぬ、ラストに自信ある我は一本一本オールを合せ高工を敵として進みしに何ぞ計らん四百米に於て八商我に先んずる事一艇身半何を小癪な、いざ今ぞ！ミツドルヘビーの聲と諸共に、調子一新忽ち肉薄其の差半艇身となりたれば敵もさるもの、我一漕せば彼も一漕、我ココ十本を叫べば彼の舵手も奮勵叱咤漕手をはげまし實に蛟龍の玉を争ふに似たり、此處に於て我はラストヘビーを絶叫し、ピッチを急調に上げて猛進

し、得意の秘漕數本今に彼を抜かんとするその刹那なりき一發の號砲は審判艇上に響きたり、嗚呼我は敗者か、力彼に劣りしか？練習の不足なりしか？我に幸運なし、高工を數艇身後に見、暫か寸尺の差にて八商の爲に憤死しの、その歴史を飾る餘る優遇を受け神戸發七時の列車にて恨を呑みて歸彦せり。諸君我等不肖にして汚名を受けたり、先輩の名譽をきづつけたり、諸君の期待に反されたく自信に自信を持ちて向ひたる此の神戸遠征も空しく失敗裡に終へたるなり。先輩諸君より身に降らざりしを諒せられよ。

出漕者氏名

舵 手	富 田 延壽
整 調	三 橋 勝彥
五 番	林 茂 雄
四 番	伊 夫 伎 直 三
三 番	三 原 寅 三 郎
二 番	池 田 暢 夫
艇 艏	成 宮 秀 夫

り尚選手諸君の自重を望む。

第一回普通レース

赤	藤田組	第一着	六 分 廿秒
白	上田組	第二着	六 分 廿三秒 2 下

五月二日此の日や天氣晴朗にしてボートレースのあつらへ日和なれば朝より大洞へ指して観客つめかけ非常なる盛會なりき大洞の會場には我水上部の歴史を飾る二竿の優勝旗翻り突兀たる金龜城は幾百年の目を開いて我等のモーションを觀めてゐる我等は此優勝旗を見る毎に我水上部の昔時の隆盛を思ひ益々彦中のボートを天下に轟かすべきであるかくては九時に至り準備全く終り開會せらる。

番外選手獨漕
舵手 整調 五番 四番 三番 二番 一番
福田 三橋 林 三原 伊夫岐 池田 成宮
五分四六秒
選手たるや毎日或はバツク臺に或はボート猛練習に勉めし賜物本日劈頭にかかるよきタイムを示せる。

第二回普通レース

赤	鷺塚組	第二着	六 分 十九秒	三 コース
青	漢見組	第一着	六 分 三秒	二 コース
白	吉村組			一 コース
赤	伊夫岐組	第一着	六 分 十六秒	三 コース
青	天方組			二 コース
白	岡本組	第二着	六 分 十九秒	一 コース

第四回 對部レース

赤 野球部	第一着 六分	三コース
青 庭部部	第一着 六分	一コース
白 武術部	第二着 六分二秒	二コース

さあラケットかバットかシナとかどが強い力試
めしの試合此時各部共應援の聲喧し赤の野球部ボ
カンとして居残る青オールも渝ひ技倅勝れ本日中
選手のけては最良のタイムなりラストも又見事赤
白は嗚呼終にラケットに叩き潰されぬ何ういふわ
けか毎年庭球の勝にきまつてゐる。

第五回

赤 池田組	第一着 六分卅秒	一コース
青 辻組	第二着 六分卅二秒	二コース
白 鳥居組		三コース

青赤の伯仲の戦なりき

第六回 職員レース 直航

赤 川島先生組	第一着 三分四三秒	
青 寺島先生組	第二着	

毎年職員のレースは興味を以て迎へらる先生方も
中々優勢で青赤殆んど甲乙なし敗けた川島先生僕

赤 成宮組	第一着 六分五秒	一コース
白 山崎組	第二着 六分十八秒	二コース

七分はあまりのタイムなり白赤其猛者連なるに、
多分六分の誤ならん時正に午天太陽赫々として輝
き渡り見物人は益々雲集す。

第九回

赤 松本組	第二着 七分一一秒2/5	
青 治部組		
白 棕田組	第一着 七分六秒	

第十回 特選レース

赤 岩根組	第二着 六分十五秒	二コース
青 山崎組		一コース
白 藤田組	第一着 六分一〇秒	三コース

藤田組始めは負けたれど名譽なる特選で勝利を得
て大祝。

第十一回 名譽レース

赤 漢見組	第一着 六分五秒	三コース
青 福永組		一コース
白 成宮組	第二着 六分二〇秒	二コース

本日中の最大の名譽は誰れが手に落つるぞ皆鉢巻
しめて奮戦す赤六艇身の差にて大勝し月桂冠を握
る。

第十二回 來賓 直航

赤 東林組		二コース
青 寺島組	第一着 三分三一秒	一コース

來賓レースのメンバー(來賓少なき故來賓と職員
とに分けてなせり)

赤 來賓組(青)	寺島 藤田 満島 藤谷 中村	
青 中川	藤下	
白 職員組(赤)	東林 池田 本多 室谷 森下	

は確かに勝つたと思つてゐたと云つて居られた。

第七回

赤 福永組	第一着 六分一〇秒	二コース
青 岩根組	第二着 六分一二秒	一コース
白 三橋組		三コース

三艇共に猛者連孰れが勝つともわからず愉快極ま
るラストに至り審判官をして煩はしむ青二秒の差
にて勝をゆづれりとは云へ其努力賞するに餘りあ
り。

第八回

赤 松本組	第二着 七分一一秒2/5	
青 治部組		
白 棕田組	第一着 七分六秒	

本日大會中最大の見物且つ無敵團とも名づくべき
奉公團と我選手との試合なり我等は感極つて必ず
敵を挫かん事を祈る暫くして奉公團の練習あり武
德會の優者だけに悠々たる中にも垢抜したる所あ
り約二時間待ちし後彼れは何の不平ありてか突然
歸れり。池田先生に直航にしてくれと頼みし故コ
ースを延ばしに行かれた其間にせぬと言ふ我選手
は試合の爲向ふ迄漕ぎ出せり。實に無禮千萬嗚呼
我等は此二時間は何の見る物も無く只退屈して呆
然たるのみ見物人もぼつゝ歸る日頃此強者と雌
雄を争はんとして熱烈なる練習をなし我等も傍観
して感動に値ひせり。愈試合に裏切られし選手諸
君嘸無念なりけん嗚呼一體奉公團は何故に遠路態
來て歸つたのであらう。

第十三回 年級レース

五年 大庭組	第一着 五分五五秒	二コース
四年 堀口組	第二着	一コース
三年 力石組		三コース

各年級を代表せる選手此時年級の應援の聲四方に

起る年級順となる時に四時半校長の訓辭ありて解散せり。(UO生記)

メモリ一

端艇部 後 援 團

時是大正九年六月我校應援團の組織なるや野球部後援團は炎々下に其の活躍を開始し、水上部には選手の猛練と共に我等は校友の誠意を繼ぎて之を後援すべく立てり。是よりは鏡の如き琵琶の湖上には常に三艇の赤旗を摩すを見たり。長曾根埠頭より千二百米のコースを日々浪を蹶つて駆進しぬ。炎熱直下白砂焦ぐるの日も暗雲ひく、巨浪岩頭を咬むの日も斯くて汗と血を絞るを忘れざりき。時には竹生島に南無妙法蓮華經を訪ひ怨敵復讐の誓を爲し或は長濱に遠漕餾飪のマニーに窮じ。斯くて八月四日は次第に近づきぬ。選手の腕は月と共に冴へ色いよ／＼黒し、實に「彦中健兒はお濱で育つ色は真黒けで目はキヨロリ」なる哉。臥薪嘗膽の辛酸此處に九旬三伏の炎下に火

十日此の自信と此の意氣の下に校友の熱誠に送られて萬歳聲裡波止場を離れぬ。周湖の遠征万里の戰場に向ふ雄々しさよ。第二選手は後れて三十日出陣す。

斯くて兩選手を送り次で八月二日末明我等後援團は武德會出漕を兼ね今後の決戦に後援すべく出發しぬ。

大正九年八月二日 晴

石場日記

石場ヶ濱に着きしは午前八時なり
一天雲去つて湖上拭ふが如し。蜿蜒西江洲の連山を前に控へ右手には高く三上山此一處ぞ我校選手の四度來襲し而て四度慘敗せしころなり。

近く脚下に打ち寄する藻と戯るゝ小波も幾度か此處に注がれし我先輩選手の恨と血涙を交ふるかと思へば胸を絞る無念さに握りし拳を思はず震せき。

ぬ。はるか沖に目を轉すれば三個の赤きブイは波に隱顯し之に續いて決勝線まで數本の竿立てられたり。モータボート小蒸氣は警笛囂々その間を駆馳す。海内を擧げてのボートの猛者連は彼方の岩間、此方の樹隠に陣取り今しもスタートを切らんとする練習艇にひとしく目を注ぐ。或は望遠鏡を具へ或は双眼鏡を手にするもあり。漕法タイムの研究ビッチ等は一々之をはかり可來決戦に於ける作戦の資と爲さんとなり。戦機いよ／＼迫れる此の戦場、正に山雨の來たらんと欲するの感あり。

今日は最後の練習日なれば我等後援團は赤鬼俱樂部と名乗り初めてのコースをひく事となれり。此の物々しき監視の中に初陣の若武者は先づ武者ぶるひを禁じ得す。

三日 晴

今日は競漕艇修繕の爲使用を禁せらる。各自艇によりて練習するもあり、宿に氣焰を吐くもあり。作戦をめぐらすもあり。かかる程に抽籤に出でし舵手も歸り來たる。報に依れば、

第一回戦 彦根第一膳所第一 第三回戦 彦根赤鬼長濱農學 第七回戦 彦根二
二でついに我敵定るや元氣前日に百倍し、松の木の下でつけられし記録帳を引張出し、敵のタイムをしらべるやら、ビッチを計るやら大騒となれり。相手の短所をばかり發き出し悪口雑談にふけり、自惚のみ強くして明日こそ彦中の全捷と獨りきめては明日になれりと。

四日 雨

明くれば五日 今日こそ晴れの決戦の日なれ。先づ心身を清めて各々天孫宮(佃亭前之神社)に詣す。
朝食を終れば正に七時開會の期は迫りぬ。斯くて金龜城下の健兒此處に二十一騎「勝たすば生き

て」の決心佃亭を後にす。再び神前に額づき最後の祈を捧げ必勝を期して征旗を押し立つ。逡巡たりし夜來の怪雲今は全く晴れて旭光東天に輝きぬ。

あはれ雲まつ蛟龍一度地を搖れり誰か能く行方を拒むものぞ！

* * * * *

(第三回戦)第一回戦の快勝よろこびもあへず早や三回戦とはなれり。我等初參の若武者意氣昂然オールを握る。乗艇瀛洲は肅々ニコースに向ふ。思ふに愛知は東海の雄方に我敵たり。肉彈以て之に當るべし。練習未だ日淺くとも我に力あり。力は彼のぐるども我に意氣あり。愛知匹夫の勇ありとも亦鬼魂豈之にひるまんや。スタートに着けば風強く波いよ／＼荒し。曲らんとする艇首を幾度か立て直し、號砲一發オールは既に水を搔きつ。愛知初めなか／＼滑りよし、スタートは先づ彼に譲りて四日市を左舷にストロークに漕調を整へ追進す、斯くて三百を過ぎ五百米のボールに入るや奮然ビッチを上げミッドルの肉迫を試む。舷低

かくて漸く一艇身の差を以て七百のボールに進む。力已に衰へ敵の艇脚も又鈍る。今こそ！我は遂に最後の肉迫を最後の追撃を試む。確かに敵の虚を衝けり。ラストは利けり。ピッチと共に艇脚は上り刻々肉迫して後百米に至る。愛知右舷に、四日市左舷に、共に力つきて！今一息。あゝ今一息艇脚何ぞおそき。

「自暴一五本！」の絶叫と共に死戰に入るや、轟然の號砲たちまち我心を貫てぬ。我再び起たず。おそれし愛知又斃れて榮冠とこしなえに四日市に歸す。

(關ヶ原戦)第七回戦に我第二は不俱戴天の仇敵と睨られ惜しくも膳所に敗れ今は早や今日の最後を飾る決戦とはなれり。第一選手は決死已に艇船上の人となる。敵は目指せし米子及三回戦の勝者四日市となり。敵の應援や彼方に端艇を並べ此方に

？後百米！急に敵の肉迫を感じず。

* * *

號砲轟けり矣。花火は上れり。噫我語るを得ざりき、見よ天空に漂ふ旗の色を、たちまち勝鬨のござよめきは耳を聾せり。そは我を呪ふ惡魔の叫にこそ。拍手は響き渡りぬ。我れ耳を掩へり。而て泣きぬ。哭しぬ。年來の宿望は咄米子の爲に挫折され懸命の壯圖も徒に憤涙々として石場の水を汚さしむるに過ぎざりき。血と涙に叫ばれし「彦中萬歳」の聲は只此のつきせぬ恨を語るのみ。

(艇端部後援團)

琵琶湖周湖日記

澤田辰次郎記

七月二十七日我等端艇部第一選手は四日間の日

數を以て琵琶湖一周の途に上らんとして東雲漸くしらむ五時半日頃の愛艇比叡號を湖の鏡面に横へぬ。六時を告ぐる城山の鐘の響我が耳に達して優勝旗持ち歸れよ！彦根をして水上霸王の名をなさ

く、浪高し苦闘又苦闘漸く四日市に迫るや彼も又ピッチを上げて之に應じぬ。氣彼に譲らず否已に敵を呑むも初陣の悲しさ、はやるは只心ばかり艇脚思ふに任せす。噫之を如何せん。

和船を連れ、汽船に依る者さへあり。奉公團は皆米子を援け岸上の觀衆も多く米子に與する中に我應援船は只二艇。一は先輩校友、分乗し決勝線に待ちは後援團のラストより追援すべく七百のボールに待てり。四面すべて敵なる中に金龜に一中の徽章を白く彦根中學校應援團旗、紫の一流は折しも西南の風にあふられて一般の光輝を添へつ、實に興敗の決此の一戦にあり心に神を念じつ艇首を立て直す程もなく一發の號音浪に消えつ。スタートは切られぬ。浪荒れ天曇りてさだかには別らねどコースに依りて之を辨せばスタートより我優勢に出で五百米に至る頃四日市次第に後れミッドルに於ける米子との接戦！實に手に汗せしめぬ。銳き米子の追及をよく切り抜け力漕又力漕漸く七百にかかるや後援團は俄然奮進し聲援と怒聲とを浴せつ追進す。

疾驅。々々。九百のボールは後となれり。彦根方に米子に先驅す。噫最早勝てり矣。「こらー」。忽ち我左舷に當りて怒聲耳朶を打てり。我オールの敵の應援艇に水を浴せしなり。噫！何を嘲するか

しめよ！月桂冠を持ち歸れよ！とさも心あり氣に耳語するを神の使者と喜び校友諸君の我等が爲に熱叫せらる萬歳の聲に吹き送られてなつかしき彦根を出發しぬ。湖面油の如く艇足なめらかにになりオール軽く水を蹴る。部長池田先生同乗せらる。降らず照らす好日和。風も無し。唯我が日足の進むがまゝに朝氣の攪亂せられて動搖するのみ。あのなつかしき鐘の音の七時を湖上に知らし来る頃は早や長濱を右手に多景島を左手に控へたり。校友諸君の我等に寄する望に報ひざるべからざるを思ひては一本々々正確に力漕に力漕を重ね九時に餘す僅かにして竹生島に着す。道程七里とか。島に上陸して中食を終へしはしの午睡を取り、午前十一時本日に目的地鹽津に向ふ。此よりは湖水の狹灣を進むなり。兩岸左右にあつて連山高く岸本に迫り一刻々々兩岸の景更まる。灣は一曲して外海の竹生島はかくれぬ。暫しする間もなく又一曲して鹽津の埠頭現れぬ。近づけば遙々遠路の處を態々横關君富永君等出迎へられて宿に着し一日の辛苦を語る。九時就寝。

くして池田先生舵手の看護の下に漸く我に復すと思へば又もや二番不覺の境に陥りたりしが日頃鐵へし鐵身何ぞ崩れんや！暫時の看護に回復しぬ。二人も倒れたるに尙他の四本のオールは赤銅子の鐵腕に力強く殊にバウ、四番の力漕只ならず。嗚呼爰に快ならずや！東に昇る數條の黒煙金龜城の聳立せる彼岸を望んでは今は西岸に近く路を取るとも豈校友諸君の熱情を忘るゝを得んや、漸く大日頭上を過ぐる頃そよく吹きて我等が元氣を復し程なくして大溝に着す。夕刻入浴するに各漕手の「シリ」猿のそれの如し。

夜月空に冴え一點の雲だにもなし。湖岸を歩して波止場に出づる一老車夫ありて彼が競争の経験を語つて最後に曰く競走の要訣は最後の五分時にあると我等は之を天使と拜受し宿に歸つて天に勝利を誓つてぞ寝る。

二十九日翌朝早く元氣層一倍して愛艇に身を投じて堅田をさしてぞ急ぐ行く。白鬚神社近江舞子の名所を訪ふに右岸は綠松連々と打ち續き白砂と相映じて尚一層の美を増す背面には高山聳立して

二十八日昨日の景色一變して雨となりたるを以て一同何することもなく唯雨の霧れるをのみ待つ。九時頃怪雲残りなく霧れたるを以て我等一行は他日喜を以て會せんことを期して鹽津を後にし狭灣を出でぬ波静かに風そよく吹き我等の辛苦を除す。午日前よりはたゞ風全く失せ天日も我に當る者は皆焦げよとばかりに照り付けるを意せず五分十分の二人漕に互に漕法の研究をなしつゝ竹生島の西岸を掠めて過る。時正に午日。一葉島の陰より現れたれば我等は其れと三十分間のロングコースを試みんこせしも彼我を恐れてか暫し並行して後右に折れてコース外に出で去りぬ。時に船中に一士ありて彦中萬歳を絶叫せらる。我等は彼に感謝しつゝ尚も同一方向の下にコースを進みぬ。

嗚呼彼果して誰なるか？今も尚よく其の聲の耳

底に叫ぶを覺ゆ。炎熱燠くが如くなるも意とせず尚も續くるコースの中我は我知らず倒れぬ。程なく我等は全身に雨を浴びぬれ鼠の如く頭髮立ち艇内に雨溜る。暫時に波起る。波艇を超へて入り込み艇内艇外皆齊しく水、水中に坐して雨を茶積に盡食して平然たる七士。嗚呼勇ならずや又後世の思ひ出でならずや此くすること半時ばかりにして雨止みたれど風益々加はり艇も七士も藻屑となれよとばかり吹き荒ぶを熟練せる舵手の両手に巧みに操つらる。嗚呼頼もしきや我が三橋舵手！斯くして堅田に一勞を癒すべく定泊す。

三十日いよ／＼遠漕の最終日なり三日間の疲労を何のそのとばかりに勇を鼓してぞ出艇す。悠久とオール取るに何なく目的地の大津に着し周湖の舉を此に無事に終へぬ、此れより愈々會場本場に

我が勇を我が腕を揮ふ時は來ぬ。果して周湖の舉の益する所ありしや否や。?

武徳短艇大會に出演する記

澤田辰次郎記

七月三十日本日は琵琶湖周湖の舉を終へし日なり。我等は四日間の疲労を物ともせず夕刻自艇を以て大津に於ける否會場本場に於ける本年度の第一次のコースを引きしに會場特有なる比叡風吹き荒れて波高かりしも初陣の割には好成績を揚げたり。

七月三十一日本日より愈々大學艇に乗り込み我等の實力を表はすべきなり。午前の部Ⅱ風なく實に好節なりしかば第一回の試としては好成績。午後の部Ⅰ午後によく吹き荒れる又あの比叡風にリーダー少しく負く然れど略好成績。タイムは中學部第一番なり。但し艇たるや三校艇と大學艇とに

して共にアフトクラッチに非す又共に重量は軽くしてアフトクラッチと同日の談に非ざれば我が漕

中握る。

正午より旅館にて番組の發表及び艇コースの抽籤あり。池田先生舵手三橋事務所に出席せらる。

我が沈着なる舵手の報告によれば我等第一の敵は長濱農學と膳中第一、艇は蓬萊號なり而かも第一回なりと、我等の心中や如何? 長農は初陣とは云々身體、力量、漕法共に勝り膳中とても湖上に霸を稱へし者なり。然れども敵小なりと云へども侮るべからず敵大なりと云へども何ぞ恐るゝに足らんや我勇を呼して戰はんかな! 赤鬼俱樂部は第三回にして受知一中四日市商業にして之亦好敵なり。而して我が第二は第四回に膳中第二と組みすなり。嗚呼果して明日の勝敗や如何? 因みに本年度の番組を記さん。

	一コース	二コース	三コース
第一回	長 農	彦中第一	膳中第一
第二回	奉公第一	奉公第二	
第三回	愛知一中	彦中赤鬼	四市日商
第四回	京都一商	八幡商	
第五回	徳島 中	米子 中	丸龜中
第六回	大津互教會	滋賀縣警察部	

法は全く裏切られたり嗚呼惜しむらくは我が思の此に至らざるを!

八月一日天候昨日に比して稍惡傾。タイムは依然として中學部の首位。然れども此に一曲者あり。曰く米子中學なり。周湖の途に居りし時早や我が敵米中なるを新聞紙上に云ひ居たりしに果して然り。彼常に我が次位に控ふ。

本日午前八時〇〇分の列車にて我が第二来る。宿一層脹はふ。第二午後より練習開始するに相應の成績たり。

八月二日風模様あつて午後の練習日茶苦茶。奉公第一五分 秒第二 分 秒本校第一 分 秒米子中 分 秒。依然として奉公第一首位我第二位、嗚呼口惜しいかな本校の奉公に一步を譲りたるを……

本日午前の列車にて我が赤鬼俱樂部なる者來津す。

午前午後共に或續相應。

八月三日大會の前日の故なるを以て練習は中止されたり。故に自艇にて手習しの爲オールを午前

第七回 膳中第二 彦中第二

第八回 大津活人俱樂部

伏見城南俱樂部不參

而して艇は中學部は三校艇にして他は皆大學艇なり。

八月四日愈々待ちに待ちし日は來りぬ。然れども天何を思考するならんや? 東雲ほのしらむ頃はひ已におそく東風強く。湖上に白波立つ。白波岸に崩れて飛沫飛ぶ。曉を報ずる隣の雞の音すらも聞き分くる能はずして湖上に荒るゝ波浪の怒号のみあはたゞしい時計は正しく 時 時に正に怒號や酣なり。如何程風はあらくとも如何程波は高くとも何ぞ左程に懼れんや。來らば來たれ驚かじ吹かば吹けよや懼れんや日頃鍛へし此の腕をいざや示さん諸共にいざや示さん我が勇を」とばかりに會場に出陣するに漸く愛知一中のみぞ、我が後に列する。沈着と云はんか? 憶病と云はんか? 程なくするに吏員方二三名出會せられ水上警察巡査も會合せられる。暫し湖の荒れ狂ふを打ち見やりて掲示に何かしたゝめられたり。見れば「本日競走中止」と、我等一行は詮なく、宿に歸り天に武運

長久を祈り専ら體力休養にのみ務む。安河内校長、我等を宿に訪はる。

八月五日早朝朝日にこやかに東山に出で今日のレースを親しくみそなはさんとするものゝ如し。我等の勇氣や昨日に倍して盛なり、時、愈レースの幕は開かれたり。

第一回 我等一行は蓬萊號(三校艇)上に身を遷し校友諸兄諸君の聲援に且奏樂に吹き送られてスタートに向ふ。號聲一發、長農、膳中第一及び我等の都合三艇は我先にとだり出す。三百のボールを過ぐる頃ほひ最早膳中を後に見る。然れども長農我に並ぶ。八百九百のボールに進めば長農の足少しく鈍る。又もや號聲一發、天に響くに我長農に先んづる事一艇身半膳中はと見るに尙悠然とコースを引く。

第二回 奉公第一 第二兄弟相争ふ兄者兄二弟者弟二遂に兄勝つ。

第三回 我が赤鬼俱樂部の初陣なり。三艇共に先になり後になりして共にノヽ大差なくして進み最後に於て四日市商業愛知一中に先だつ約三分

の一シート我が赤鬼に先だつ事約一艇身ばかりにして決勝線に入る。嗚呼惜しいかな小差を以て我が赤鬼最早破れたり。我等奮戦したれども彼尙奮戦せり我破れたりとも何ぞ悲しまんや。只此の恨!此の耻辱!正に來たらん日に雪かん。

第四回 滋賀縣は短艇の本場。八商悠然と京一商を抜く。兄弟内に相戦ぐも外海を防ぐとか八商の勝を喜ぶ。

第五回 米子、徳島相接近し丸龜獨り「ノロクモ」
と後へに控ふ。

第六回 大津市互救會小差を以て警察部に勝つ。

第七回 膳第二兄の復讐せんとばかりに出て來たりしも彦中第一には一步を譲り而して第二を打つて仆す。何たる卑怯者ならんや!此の怨何時

の世にかは忘るべき!

第八回 城南俱樂部不參の爲大津活人俱樂部一人進んで。一人勝つ悠然たるかな!

第九回 愈々特選起る。愛知一中病人出來しため棄權故に春公第二平調に進む。

第十回 長濱農、徳中を制す長農益々有望なり。
第十一回 名譽競漕(師範部)奉公第一には如何
な八商もとても叶はじと初より一步退く。

第十二回 愈中學部の名譽レースとはなりぬ。

彦中第一 三 二 四分四十三秒₄⁵ 方丈

米子中 二 一 四分四十三秒 蓬萊

四日市商 一 三瀛洲

本日の最終のレースにして而かも最も人心を惹くレースなり。我等の案に違はず我が敵は米子中とは定まりぬ。最早や艦裝して蒸氣船に曳かれ行く時の我等の心中や如何?心を冷静に保ち丹田に沈黙の業を爲す。敵も沈黙。我も沈黙。あたりは「シン」として唯汽船の水進器の音と我等の乗するボートの水を分けて曳かれ行く音のみぞあはたゞしい。嗚呼此の戦たるや實に天下分け目の戦敗くるあり勝つあり。彼が勝つか我が彼に勝るか二つの中の一つと思へば全身に勇氣限なく満ちぬ。校友諸君の御聲援下さるゝ聲の漸く薄ら

へば蒸氣船強く一聲ビーと鳴らし、各艇各、スタートに着く。名譽の旗を握らざれば再び生きては歸らじとオールを堅く握りしむ。天の彼方より用心の聲のかゝるを今や晚しと待ちかまへし三艇はスハとスタートの綱を切つて落し漕ぐは今ぞ正味の戦は今なるぞと急調を以て進む。我等も彼に負けじと力漕す。百、三百、五百七百、常に我二艇に勝る。九百のボール近くになれば米中あの得意の今一層の急調を以て我に並ぶ。我も彼に劣らじと進むに今一本と思ふ間もなく二艇並んでゴールにだり入りぬ。彼も必死我も必死。思はず艇中に倒れたる時あたり「シン」と人々顔を見合すのみ。暫しするに審番船に「信号旗掲げられたり。舵手の曰く「」と。嗚呼此の戦途に:::にう!

最早我が事既に畢りぬ。何の面目あつてか我が校友諸君に見ゆるを得んや、日頃の練習も周湖の舉も最早何の功をも奏せずして逝きぬ。此の怨!!此の恥!!何時の世いうは忘るべき。嗚呼此の怨!!將來有望の後輩の諸君何卒我等の耻辱を雪がれんことを。終りに本年度武德短艇大會に出漕せ

られし赤鬼俱樂部の諸輩に一言せざるを得ず。嗚呼赤鬼俱樂部の諸輩よ長き暑きあの夏の日に學期試験とも云はずして我等短艇部の爲御後援下されし有難さ而かも是に何の報ゆるなくして再び諸兄に見えんことは。涙にむせんで言はんと欲して語る能はず嗚呼千々の思……

乍末筆在津中御厚情に預りし伊夫岐 兄、辻傳次郎兄に厚く御禮申して止まざる次第なり。

本年度の武徳短艇大會は中學部と師範部とに區別せられたり因みに其の各部に屬する校身を記さん、中學部、米子中、徳島中、膳中第一、第二。彦中第一、第二、赤鬼俱樂部(彦中)四日市商、長濱農、愛知一中、丸龜中師範部、滋賀師範第一、

第二、八幡商、京一商

本校出漕者左の如し。

第一 B 成宮 秀夫	第二 B 原田 政藏
2、池田 暢夫	2、野 寺 勇
3、三原寅三郎	3、藤村助三郎
4、伊夫岐直三	4、川添助二郎
5、澤田辰次郎	5、堤 英三郎

L、富田 廷壽 6、難波 考夫
C、三橋 勝彦 C、堀口 兵次
赤鬼俱樂部に付いて、抑々赤鬼俱樂部なる者は全部在學生より成る一團にして其の目的たるや本校水上部の武徳短艇大會に出漕する爲の練習の應援なり。抑々我が水上部の西津に破れし凶報至るや之を雪がんため水上部に一段の進歩をなさしめんがために有志會合して作りし者にして固よりオールになじみある者ののみの團結なり學期末に學期試験の目前に迫るも厭はず日々還手等と共に定時刻には揃つて本校艇庫に集合し、水に浴するを厭ひ食慾を忍ひ且互に戒め合ふ等規則正しく尙嚴格なる事選手と共にして實に誠心誠意我が部の爲に御盡力下されし一團なり。而して後遂に部長池田先生の認められる事となり遂に其の勧めにより此の度武徳短艇大會に出演せらるゝに至りしなり。
因みにメンバー左の如し。

B、藤田宗七	2、林茂 雄	3、北村 勝
4、伊豆川作平	5、杉本英三	L、内方孔三
0、治部 藤吉		

隅田川出漕之記

神戸に於ての敗。必勝を期した八月の武徳會競漕にも再び敗戦の涙にむせんだ我部選手は武運の拙さ、無念やの方なく、東都の一高主催競漕は毎年十月上旬に開催の由で毎年愛知一中之上に参加し旗を取つて歸るとの事を聞き、今年は必ず之に參加し年來の望みである旗を取らうと一同ひそかに誓を立てたのであつた。第二學期はしまりてより或はバク臺に、或は湖上に艇を浮べてしまひ、練習をなすより一部の者は不審を抱いた様であつたが企圖については堅く秘して云はなかつた。然れども事遂に應援團長の知るところとなつた。爾來朝はタンブに放課後は湖上に夕晩くまで技を磨き、六日朝に至つては大観コースを五分一秒で飛ばし大凡自信らしきものを得た。聞けば敵は愛知一中と慶應普通部との事なれども、慶普なぞは恐るゝに足らず只愛知は例年の事故川になれたるが恐ろしいのみである。

大正九年十月六日午後五時十五分彦根發列車にて熱烈なる校友會員諸君の應援を受け勝たすばの覺悟を定めて旅行兼應援の五年生と共に彦根の地を離れ征途に上つた。夕陽方に西山に没せんとし、あかあかと天に映り、雲を染め、恰も吾々の前途、今日の門出を祝福するものゝやうであつた。

七日朝七時廿分東京驛に到着す、多數先輩の出迎を受け神田小柳町の宿に至る。雨天の爲め道はぬかるみ大閉口、小降りとなるを待ち兎も角も川の模様を見やうとて一同川に出掛けた。ぬかるみの中を一高のK氏より贈られたコースの地圖と目標とを照り合はしながら一高の艇庫まで行つた。細雨がしきりに降りしきるので、目近にレースを控えた事故、今日は艇を借りる事は止めて、その儘宿に歸つた。飛報來り九日のつもりだつたレスは十日の由を告げた。

明くれば八日昨日の雨は名残なく晴れて上天氣なり。部長も共に一高艇庫に艇を借りに行く。朝は艇になれ程度にゆるく引いた午後は四時頃か

ら練習。コンディショニングは非常によがつたが下げ潮の時だつたので時間は相當多く要した。

九日朝練習の時、

愛知も出で、練習をして居つた。聞くところに依れば彼等は自分等の到着前一日早く來り、此の近邊に陣取つて練習を重ね居るとの事なり。

慶普も時折影を見せして恐るゝ敵にはあらず同夕六時より一高寮内に於て懇親會開かれ一同出席した午後の練習を終ふるや直ちに先輩の小西君に伴はれて一高の寮に至る。そこにはからずも去年の夏も、今夏も長曾根で色々と御



世話を受けた松岡氏に逢ふ。非常に喜んで下さつて、ホールで色々と話された。小西君にはそこで夕飯を御馳走になつた。懇親會といふのは、明日の敵を前にしての茶話會だので頗る痛快であつた。九時宿に歸る。應援團は今日午後當地に着いたとの事であつた。朝今一度最後の練習をするまで後向島の梅芳亭に於て休息した。橋本。原林等の諸先輩がしきりに御世話を下さつた。松岡氏も来て下さつて「ビーナ」を飲ました。

りなんかして勢をつけて下さる。愈々時は通りレースの時となる。三艇はランチに引かれてスタートにつく。岸には應援團の諸君手に手に旗を振り聲をからして應援し水には「彦中」と大書せる大旗を立てしボート一隻我等を應援さる。その應援のすさまじさに他の二艇は皆度膽を抜かれし態であつた。選手は皆HMSのユニフォームに身を堅め鎌倉大佛守護符をたゞみ込みし手拭にて鉢巻し發艇の相圖今や遅しと待ちうける。時は五時半過ぎ水上ほの暗く敵艇定かならざる程なりき、一發の號砲は發艇を告ぐ。三艇は弦を離れし矢の如く、一齊に漕ぎ出す、一コースは予等。二コースは愛知、三コースは慶普といふ順序也。スタートに於ては吾愛知に遅るゝ事一本なり。スタートヘビー十本の後には彼我並行となりそのままミッドルに入る。慶普は初より問題外なり。ミッドルヘビーをかけるや一本一本敵を抜き八百米程の所にては完全に愛知を抜き二コースに入り五六艇身の後に愛知をのこして決勝線に入る號砲一發予等の勝利を告げ本日の競漕を終る。愛知は途中にて断念し

オールを流せし爲め慶普二着となる。斯くして年來の望なりし旗は遂に吾々の手に收められ桂冠は吾々の頭上に降つた。此の時の喜悅此の時のうれしさ。逆も筆も言も及び難いのである。皆相擁してうれし泣きに聲を上げて泣いた。あゝ思へば幾度か敗戦の涙もて汚されし吾々の歴史も今此の勝つた此の涙を以て洗はれてしまつた。旗を團長に渡して後梅芳に戻つて休息し漸くにしてこゝを出でた。同夜九時上野發の列車で多くの先輩の御送りのもとに東京を去つたのであつた。

五年ぶりで旗が金龜の城下に翻つた。それ元より校友諸君の熱誠なる應援後援の然らしむるところであるので、吾人は諸君の御熱心なる應援後援に對して満腔の謝意を表し、又應援後援に報ゆるを得たるを嬉ぶと共に尙將來も奮つて一校を代表する選手なるものゝ應援に力をそゝがれん事を希ふものである。

終りにのぞみ、東京滞留中色々と御面倒を見て下さつた先輩諸君に謝意を表する次第でありま

す。

因に出漕選手左の如し。

C 大庭唯

L 橫關虎

澤田辰次

伊夫岐直三

豆川作平

三橋勝彦

富田延壽

三原寅三郎

三橋勝彦

澤田辰次

伊夫岐直三

市

二番の池田暢夫君は病魔のをかす所となつた爲出漕する事能はず伊豆川君之にかわつて出漕した。

大庭唯市、横關虎三、澤田辰次郎、伊夫岐直三

三原寅三郎、伊豆川作平、三橋勝彦。

近來稀に見る好端艇日和、湖面は紺青に澄みて静かなること鏡の如し。さても榮ある優勝旗、金色燐たる柏の葉は輝然として旭日に誇り、色褪せて幾多の戦跡を偲ばしむる紫色飄然として快風と語る。左に優勝選手の芳名を留め他はタイム、着順の記録に止めむ。

第一回 優勝選手獨漕

大庭唯市、横關虎三、澤田辰次郎、伊夫岐直三

三原寅三郎、伊豆川作平、三橋勝彦。

ストップ不完全の爲タイム計るを得ざりき。

第二回 松本組 一着 六三分十四秒 $\frac{4}{5}$

東野組 二着 六分五十九秒

辻組

第三回 宮内組 一着 六分二十七秒 $\frac{2}{5}$

藤田組 一着 六分四十五秒

富田組 二着 六分四十五秒

横關組 二着 七分

第十回 一年クラスレース(直航)

甲組 二着 二分五十六秒

乙組 一着 二分五十三秒

丙組 一着

て如何ともすべからざりしは致し方なし。

第四回

居川組 一着

大橋組 二着

上田組 二着

第五回

宮成組 二着

下村組 二着

押谷組 二着

第六回

平川組 二着

三橋組 二着

治部組 二着

第七回

池田組 二着

澤田組 二着

鹿取組 二着

第八回

仙波組 二着

伊夫岐組 二着

第九回 祝勝端艇競漕大會の記

大正九年十月二十三日去んる十月十日一高主催端艇競漕大會に出席し、努力奮闘遂によく優勝

の月桂冠を得たる我が端艇祝勝の大會は開かれ

ぬ。此の日や昨一昨低迷せし暗雲屬なく晴れて、

て如何ともすべからざりしは致し方なし。

第四回

居川組 一着

大橋組 二着

上田組 二着

第五回

宮成組 二着

下村組 二着

押谷組 二着

第六回

平川組 二着

三橋組 二着

治部組 二着

第七回

池田組 二着

澤田組 二着

鹿取組 二着

第八回

仙波組 二着

伊夫岐組 二着

雜乘

第一回 優勝選手獨漕

一五三